
EL—Online

アルタイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EL—Online

【Nコード】

N9471X

【作者名】

アルタイル

【あらすじ】

超能力がひっそりと存在する地球。そこに超能力を持ってしまったがゆえに、活躍の場を閉ざされた少年剣士がいた。そんな彼のもとにある日、幼馴染が世界初となるVRMMOのβテスト―当選通知を持ってくる。彼は再び剣を振るうべく、仮想現実―に身を投じることにした。だが、そこに待ち受けていたのは楽しいゲームではなく、ログアウト不能のデスゲームだった――！

プロローグ

超能力。

一般にそう呼ばれる超常的能力が世界に現れたのは、二〇一二年の七月のことであった。とある新興宗教の教祖が、権威づけのために調査機関に自らの能力の調査を依頼したのがきっかけである。それ以来、二〇四一年の現在に至るまで能力者は発見され続け、現在では顕著していない潜在的能力者を含めると全世界に百万人以上の能力者がいるとされていた。

ただし、能力者といっても彼らはそれほど強い能力を保有しているわけではなかった。たとえば現在確認されている最高レベルの念力使いでも、米袋ほどの重さを持ち上げるのがせいぜいである。ゆえに、能力者の実用的な価値はほとんど皆無だと言われる。

ただし、学術的側面においては能力者の価値はきわめて高い。そのため、中韓の台頭により斜陽の時を迎えていた日本政府は、技術大国としての威信をかけて、二〇二〇年度から超能力の研究拠点として美玖波学術特区の建設を推進。従来禁止されていた人体実験などの一部許可をはじめとする法的緩和や、安定した質の良い電力供給などのインフラ整備を徹底して推し進めた。その結果、現在では美玖波学術特区は超能力を中心とする先端分野の世界的な研究拠点となっている。

この美玖波学術特区に存在する世界有数の大企業、マルドゥック・ブレイン社。そこから先日、全世界に向けて驚くべき発表がなされた。世界初の仮想現実技術（VR技術）を利用したMMORPG、E L - O n l i n e を半年後にリリース。それに伴い、約1500

名のテスターを募って一ヶ月間のクローズドβテストをするというのである。

EL—Onlineのリリース発表に、世界は沸騰した。世界中のネットワークをたちまち「キターーーー!」や「Yea a a a h!」などといった歓喜の叫びが駆け廻り、一時、ネット掲示板のスレッドのサーバーが過剰負荷でダウンするなどのトラブルが起きたほどである。

当然、EL—Onlineのβテスターには応募が殺到した。その数なんと三百万件超え。そのため、テスターになるのは二千倍もの倍率をクリアしなければならぬということになった。しかも、テスターに応募するためには住所や氏名などの個人データの提出が必要だったため、一人で数十口も応募するなどといったことは極めて難しい。なので、世界中のゲーマーたちはただひたすらに己の祈った。日本でも、真偽のほどは定かではないが、神社やお寺の賽銭が大幅に増えたのだそう。

そして迎えたテスターの当選発表当日。ゲーマーたちが大騒ぎする中、とある奇跡が起こった。二千の一という超低確率にも関わらず、自分と勝手に応募した幼馴染の二人分の権利を当てた猛者が現れたのだ――。

第一話 レッドカラー

夏休みが始まる直前。暑さのあまり人影もまばらな道場で、少年が一人、黙々と竹刀を振るっていた。竹刀の切っ先は先ほどから寸分たがわぬ直線を描き、心地よい風切り音を響かせる。同時に踏み込む足も、板敷きの床を気迫とともに激しく揺らす。その動きは流麗で、隙も無駄もほとんどない。少年の実力は相当な物のようだ。

だが、そんな少年を見ている何人かの門下生の視線は、決して尊敬の意味合いなど含んではいなかった。憐れみとかすかな侮蔑。彼らの視線に含まれる感情はほとんどそれだけである。なぜならこの少年がどれだけ努力しようと、どれだけ強くなろうと、活躍の場が与えられることなどないのだ。この少年はレッドカラーなのだから。

レッドカラー、それは能力者たちの通称。

この言葉は一般人たちにとってはさほど意味を持たない。能力者といっても僅かばかりの力が使えるだけで、さほど脅威でもなんでもないからだ。超能力による攻撃などを心配するより、車にでも注意していた方がよっぽど生産的である。ゆえに、能力者たちはさほど尊敬もされない代わりに差別されることもない。せいぜい片田舎に來た外国人といった程度の扱いを受けるだけ。若干の疎外感を感じるものの、許容範囲である。

だが、スポーツの世界においてレッドカラーはきわめて大きな意味を持つ言葉だ。わずかな力の差が勝負を決する世界においては、能力者の持つ能力は無視することができない。なので能力者は、すべてのスポーツにおいて公式試合には出場禁止。これがレッドカラーという言葉がスポーツの世界で持つ意味だ。

少年こと柏木直人は、将来を約束された剣士だった。彼は優れた目を持っていて、相手の動きが非常に良く見えたのだ。そのため試合では連戦連勝、負けなしの剣士と言われていた。このまま成長していけば全国大会で優勝することも、果ては世界の頂点に立つことさえもできるだろうとも。

しかし、十四歳の冬。定期検査でその目は加速眼と呼ばれる超能力だったことが判明した。

それからというものの、直人の生活は変わった。手にした賞状やトロフィーはもちろんのこと、段位すらも奪われた。周囲の人々から賞賛を受けることはなくなり、それに代わって憐れみと侮蔑が浴びせられるようになった。努力が認められる機会はほとんどすべて消えて、むなしい練習の日々だけが残った。

だが直人は剣道をやめなかった。剣を振るうのが好きだから、ただ単純にそれだけの理由だ。

そうして少年は今日も、奇妙な視線を浴びせられつつ道場で修練に励む。たとえそれが報われない努力だと知っていても――。

夕方、生ぬるい風が僅かながらも冷たさを帯びてきたころ。ようやく直人は竹刀を振るのをやめた。彼は渴いたのどを潤すべく水筒を取りに向かう。夕陽に影を差しながら、彼は道場の隅に置いた荷物へと歩く。その時、彼の頬に不意に冷たいものが当たった。

「久しぶりだな、直人」

直人がビックリして後ろを振り返ると、そこにはペットボトルを突き出している少女がいた。濡れたような長い黒髪に、切れ長で涼やかな印象の目元。細めの唇は少し薄く、全体として凜々しい顔をした少女だ。その顔を見ると、直人ははっとしたような顔をする。

「環？ 何か月ぶりだ？」

「まだひと月ってとこだろう。道場で会うのは中学以来だな」

「そっか、まだそれぐらいか」

環というのは直人の幼馴染の少女だ。家も近所で、直人とはこの道場でともに修練に励んでいた仲である。加えて、彼女もまたレッドカラーの一人であった。能力名は電磁誘導。乾電池ほどの電流を操ることしかできない能力だ。しかし、能力が弱くとも能力者は能力者。直人と同じく剣道の公式試合には一切の出場が禁止されていて、彼にとってはある種の仲間ともいえる存在である。

だが、環は直人とは違った。彼女はレッドカラーだと判明するとすぐに道場を辞めてしまったのだ。それ以来、二人は何となく気まずい雰囲気になって疎遠になった。中学までは毎日お互いの家に遊びに行ったりしていたのが、高校生の今では月に一度会えばいい方である。

そんな環が、なぜ直人に会いに来たのだろうか。しかも二人にとってとはタブーとも言える場所であるこの道場へ。直人はスッと眼を細め、環を睨んだ。すると環は、その揺れんばかりの胸元から一枚

のカードのようなものを取り出す。

「フフツ、今日はこれを直人に届けに来た」

「なんだこれ？ ……って、これどうやって手に入れたんだよ！」

カードにはEL—Onlineのテスター当選通知と書かれていた。直人はそれを見て眼を丸くする。めったに手に入るものではない。

「二人分応募して置いたら見事に当たってたんだ。どうだ、一緒にプレイしないか？」

ニヤツと笑う環。その顔は自信満々だ。それもそうだろう、直人ぐらいの年頃の人間たちにはあこがれのテスター当選通知なのだ。だがそれに対して、直人は少々申し訳なさそうに顔を下に向けた。彼の唇が薄く開かれ、ぼそぼそと言葉が紡がれる。

「ごめん、せっかくだけどやめとく。お前一人で楽しんでこいよ」

「つれないなあ、こーんな美少女が誘ってるっていうのに」

「……お前、見た目は最高だけど中身は半分男じゃないか」

シャツが裂けそうなほど膨らんだ胸を寄せて色っぽい顔をした環を、直人は斬って捨てた。女や胸に興味はある……というより両方とも大好きな直人だが、環は別だ。そのガサツすぎる本性を彼は知りすぎていた。もっとも、環が本気だというなら相手をすることもやぶさかではないだろうが。

「くッ、相変わらず失礼な奴だ。こう見えて私はモテモテなんだぞ？ ……まあ、そんなことは置いて。E L—O n l i n eでは刀を使って戦うこともできるんだが、それでも嫌か？」

「……………!!」

薄くなっていた直人の眼が見開かれた。彼は環の手から驚異的な動作でカードを奪い取ると、食い入るように見つめる。その表情はどこか虚無感の漂っていた先ほどまでとは違って、活力に満ちていた。そう、まだ能力者だと告げられる以前の彼のように。

「ククッ……」

彼の口から、かすかに音が漏れた。その空気音は段々と大きくなっていく。そして――

「……ハハハッ、わかった！ E L—O n l i n eをやるぞ！」

少年の叫びが、人気のない道場にこだました――。

第二話 マルドウック・ブレイン社

視界が跳んでいく。山々の青い稜線が、速度のあまり波打つように見えた。窓側の席に座っていた直人は、そんな景色を見ながらフウとひと息つく。

βテストたちを乗せた貸切りニアトレインは一路、東京から美玖波を目指して疾走していた。βテストは、美玖波学術特区の中に存在するマルドウック・ブレインの本社で行われる。夏休み期間を丸々使って、一か月もの間、マルドウック社に泊まり込みで行うのだ。当然、その間の食費などはマルドウック社の負担である。

「わくわくしてきたぞ……。美玖波ってどんなところだろうな？」

「うーん、普通の街なんじゃね？」

「夢のない男だ。あの美玖波だぞ、スーパーロボットとか居そうじゃないか」

「馬鹿、俺たちはロボット見るために美玖波まで行くんじゃないんだぞ」

興奮する環に対して、直人は落ち着き払った様子だった。彼は座席に腰を沈めると、背中を大きくそらせる。その目はどこか遠くを見ているようだ。彼の意識はすでに美玖波という近未来都市よりも、その先にあるE L - O n l i n e に向けられているのであろう。しかし、環はそれがイマイチ面白くないようで、不満げな顔をする。

美玖波学術特区は徹底した秘密主義で知られる街だ。先端技術の

流出を防ぐために、出入りできるのは住人と特別なパスポートを持つ人間だけ。しかも街全体がアルファベット順に五つに区切られており、ランクの高い地区に入るためには日本政府の許可がいる。ゆえにマスメディアですらその内部を撮影したことはまれであり、人工の秘境とまで言われていた。

今回、βテストが行われるマルドゥック社は上から二番目にランクの高いB地区に存在していた。必然的にβテストたちにはB地区まで侵入できる許可が与えられる。これはきわめてまれなことであり、近未来都市といわれる美玖波を見学できる絶好のチャンスといえた。だから環が興奮するのも、それはそれで仕方のないことなのである。

そうこうしている間に、列車は美玖波へ近づいて行った。到着まであと三分ほどというところか。するとここで、車内アナウンスが流れる。

『皆様、おはようございます。当車はまもなく美玖波駅へ到着いたします。到着後は置いてありますサングラスをご着用の上、速やかに降車してください。その後の指示は現地スタッフがいたします』

直人と環は素直に指示に従い、座席の脇に付けられていたラックからサングラスを取り出した。そして、そのまま何の疑いもなくそれを頭に掛ける。すると、彼らの顔が露骨にゆがんだ。

「なんだこれは！ これじゃ街の样子があんまり見れないじゃないか！」

「機密保持ってやつだろうな。ずいぶんと念入りなことだ」

サングラスを掛けると、視界が丸く切り取られたようになった。これでは真正面しか見られない。その事実にがつくりとうなだれた環。それを見て、直人はハアと息をついた。彼はやれやれとばかりに両手を上げると、死体と化している彼女の腕をひつつかむ。

ちょうどその時、身体が後ろに引っ張られるような感じがした。列車が止まったのだ。直人はそのまま強引に環の腕を引きながら、座席の間を抜けて列車から降りる。

ホームにはすでに人だかりができていた。わらわらと集まったその群衆は、ざっと見て千人以上か。どうやらβテスターたちはこれで全員のものである。その中には外国から来たのか金髪や赤髪の間も見てとれて、ずいぶん国際色豊かだった。

そんな彼らの中央で、ガイドらしき女性が声を張り上げていた。だがその声は異様なまでに無機質で機械的だ。不審に思った直人が眼を凝らして彼女を見てみると、何となく違和感がある。どこか、見慣れない感じだ。すると環が突然復活して、大きな声を上げた。

「あのガイド、アンドロイドだぞ！」

「えッ？」

「ほら、良く見てみる。関節の部分が人とはちょっと違う」

そう言われた直人がガイドの関節に注目すると、確かにその部分は妙に角ばっていた。明らかに、人間の関節の造形ではない。直人は一瞬でそれを見抜いた環の観察眼に舌を巻く。中学で剣道をやめて以来、ゲーム廃人になったと噂の環だが、その確かな観察眼はそれほど衰えていないようだった。

驚いた顔をした直人に、環は得意げに知識を披露し始めた。彼女の声は得意のためか、だんだんと大きくなっていく。すると、一人の男が彼らの方に近づいてきた。一昔前に流行した、ハードボイルドを思わせる男だ。彼は二人の間にさりげなく割って入ると、シッと人さし指で口を押さえる。

「お嬢ちゃん、あんまり騒がない方がいいぜ。どうやらマルドゥック社の連中は俺たちに黙っていてほしいみたいだ」

男は指でさりげなく、直人たちを取り巻くように立っている黒服の男たちを示した。彼らは全員、こちらの方に強い視線を向けている。その視線は冷徹で、ほのかな殺気だったものを感じさせる。環は思わず顔を青くすると、男に顔を近づけた。そしてできるだけ小声で囁く。

「な、なんだあいつら。ガードマンか？」

「おそろくな。だけど、あいつらはそこの警備会社とかの連中じゃないぜ。ポケットの膨らみ、あれは間違いなく拳銃を忍ばせてる」

「なッ！」

「せいぜい気をつけな。それじゃ、俺は仕事があるのでこの辺で」

男は気障っぽくささやくと、人ごみに消えていった。環はその後ろ姿を、半ば茫然とした様子で見送ったのだった――。

「あんな男の言うことなんか、信用することないだろ」

「でも、嘘を言っているようには見えなかったぞ」

「嘘じゃなくてただの勘違いだ。そんなことありえない」

マルドゥック社へと向かうバスの車内。そこで直人は環に呆れたような顔をして言った。彼は大きく息を漏らすと、環にまた良く言い聞かせる。

いくら美玖波がアンダーグラウンド的な性質を持っているからといって、ガードマンが拳銃を持っているなどあり得ない。銃刀法は未だに健在で、一般人に銃の所持は認められていないのだ。ガードマンといえど警察官などではない以上、拳銃を所持していることなど法的にありえない。直人はそんな当たり前のことすら忘れている環に若干のいら立ちを覚え始めていた。だがそれは環として同じように、彼女もわからず屋の直人に少し腹を立ててきている。

そうして二人の周りに、若干重苦しい空気が漂い始めた。なんとも言い難い、嫌な空気だ。だが、そんな空気は突然に取っ払われた。

「皆様、まもなくゲートを抜けて美玖波学術特区に入ります。ぜひ、外の眺めをご覧になってください」

先ほどのアンドロイドガイドが、至極無機質な声で乗客たちに告げた。二人はひとまず仲直りすると、仲良く窓の外をのぞきこんでみる。すると巨大な壁が迫ってきて視界がにわかに暗転。さらにその直後、二人の前に別世界が現れた。

「凄い……！」

「すげえ……！」

美玖波学術特区は、想像以上に未来的な都市であった。昔の人間が思い描いた、空飛ぶ車が飛び交うような未来世界。まさにそれを地で行っている。流線型の高層ビルが林のように整然と並びたち、その間を空中道路が縦横無尽に走り抜けている。幾重にも重なり合ったビルたちはすべてガラス張りで、陽光をキラキラと反射して眩しいほど。その燦々と輝く未来都市に、直人と環は感嘆の声を上げずには居られなかった。

二人が感心している間にも、バスは都市の中を疾走していった。やがていくつかのゲートを潜り抜けると、二人の前にひと際巨大なビルが現れる。そのビルは雲を貫くかのような高さで、螺旋状に渦を巻いていた。さらにその頂上には巨大な球体構造物を掲げている。その滑らかな表面には緑色の文字で「Mardock Brain」と刻まれていた――。

第三話　アーク

マルドゥック社の中に入ったテストーたちは、それぞれ三十人ほどのグループに分けられた。そして各グループごとに例のアンドロイドガイドが一体つつ付き、ひととおり社内を案内される。

マルドゥック社の内部はさすがに時代の最先端を行く会社だけあって、内装からしてどこかSFチックだった。特殊金属でできているという銀色の内壁に、社内を見回る人型警備ロボット。さらには空中に浮かぶ空間ディスプレイや社員たちが乗り回すスカイボードなどいちいち未来的である。環はそれらを見るたび眼を輝かせていたが、その一方で直人は冷ややかだった。彼は早くゲームがしたくてたまらないのだ。いや、正確には早く刀で戦いたくしようがないというべきか。

やがて、社内見学も終わりテストーたちは広いホールのような空間に集められた。彼らはここでようやくサングラスを外すことを許可される。テストーたちは広がった視界を存分に楽しむかのように、あたりを見回した。

ホールは大学の講堂のような構造をしていて、奥にはカーブを帯びたディスプレイが備え付けられていた。前に置かれた演壇の大きさをみると、高さ七、八メートルの横幅十五メートルはあろうか。映画館のスクリーンばりに立派なディスプレイだ。

直人たちがこのディスプレイの正面付近の座席に腰かけると、タイルリングを見計らったように画面が光を帯びた。映画のオープニングムービーさながらの派手な映像が流れていき、最後にマルドゥック社のシンボルである、縦半分だけの仮面が黒地に赤という色彩で

表示される。そのマークはどこか呪術的で、宗教じみたものを感じさせた。直人の顔が、少し不機嫌そうに歪む。

「あんまり趣味の良くないマークだな」

「そうか？ 私はカッコいいと思うが」

「……お前、結構厨二だろ」

「ひ、人が気にしていることを……グハッ！」

環は刃物で刺されたかのように大げさに胸を抑えると、直人の方に倒れかかってきた。大きくてやわらかいものが直人に思いつきり押し付けられる。直人は顔を真っ赤にしながらも、倒れてきた環をどかした。その唇は固く結ばれていて、視線は環から露骨にそらされている。環はそんな直人を見ると、いたずらっぽく笑った。

「照れおって。別に触っても構わんのだぞ？」

「お前が良くても俺が駄目だ」

「つれない奴」

環はつまらなそうな顔を見ると、身体を揺らして椅子に腰かけなおした。するとここで、壇上に一人の男が上ってきた。四十前後の背の高い男で、高級感のあるデザイナーズスーツをピッチリと着こなしている。そのスラリと伸びた背中や爛々と輝く瞳は溢れるばかりの精力や存在感を感じさせ、客席にいた人間たちは彼の動きの一つ一つにくぎ付けになった。天性のスター。そう呼ぶのがまさにぴったりの男だ。

直人はそんな彼の眼に嫌なものを感じた。されど、つつがなく事態は進行していく。男は何事もなく演壇にたどり着くと、マイクを手で声を張り上げた。

「みなさん御機嫌よう！　今回はEL－Onlineのクローズドβテストにご参加いただきありがとうございます。私はマルドゥック社の社長、黒柳です。どうかよろしく！」

客席から数え切れぬほどの拍手が巻き起こった。バチバチという音が、津波のようにホール全体を揺らす。黒柳は拍手にこたえるように手を挙げて、拍手の嵐に負けないぐらいの声を絞り出した。

「ありがとうございます！　まずは今回のクローズドβテストについてなのだが……」

黒柳は非常に饒舌で、説明もわかりやすかった。時折ジョークを飛ばしながら進めていくその説明は、まさに天才的といえよう。そんな彼の話を要約すると次の三つに集約された。

一つ目はEL－Onlineはゲームという枠を超えてマルドゥック社だけでなく、人類的な事業になるであろうということ。二つ目はβテストの期間中は一日五時間以上EL－Onlineにログインすることを条件に好きなことをして構わないということ。この際、立ち入り禁止区域に入らないなど最低限のマナーを守れば、本当に何をしていても構わないらしい。三つ目は、今後の詳しい日程などである。ちなみにEL－Onlineのゲーム内容などについてはほとんど語られることはなかった。ネタばれはしないということのようだ。

直人は長かった割に話の内容の薄かったことに驚いた。とくにβテストの規則などは、ゆるすぎて拍子抜けしたほどである。そのため彼の意識はたちまち説明のことから、この後行われるアバターの作成へと移された。環も直人と同じだったようで、何かの写真を片手にああでもないこうでもないと思ひはじめる。

その後、直人たちは再びグループに分けられアバター作成のための検査に向かうこととなった。テストたちは薄っぺらいシャツとパンツに着替えて身体のサイズ測定、血液検査、脳波測定、心電図、果ては超能力関連の検査など全十種類にも及ぶ検査を受けさせられる。直人や環はそのあまりの煩雑さに少しくんざりしたような顔をしながらも、これもVRMMOで遊ぶためと割り切ってすべての検査を文句ひとつ言わずに受けた。

数時間後、検査を終えた直人と環はマルドゥック社の敷地内にある宿泊棟へと来ていた。社外の人間や一部の研究者などが住み込みで働くために整備されたというこの棟の内装は、一見すると高級ホテルのような風格がある。敷き詰められた毛足の長い紅絨毯と、木目が美しい飴色のドアがなんとも言えぬ気品を醸し出していて、ところどころに絵画や観葉植物まで飾られている。直人はそれを見てずいぶん景気のいい会社だと思った。

「えーと、私はここか。それじゃ、また夕食時に」

「ああ、またな」

テストたちには一人につき一部屋個室が与えられていた。この個室にVR機が置いてあり、アバターの作成やプレイはすべてこの個室内で行われる。実際の家庭での使用を想定してのテスト、ということらしい。

環と別れた直人が早速部屋に入ると、彼の眼に異様なものが飛び込んできた。古代の石棺に幾何学的な文字を隙間なく刻み、絡まり合う無数のコードをつないだような物体。その表面は黒い石のような材質でできていて、白い蛍光灯の光をユラユラと反射している。大きさはダブルベッドほどだろうか。しかし、直人にはそれがどうしようもなく巨大なものに思えてならなかった。まるで巨人と相對しているかのような威圧感を彼は感じた。

「これがVR機なのか？」

直人はそっとその表面に手を置いてみた。温かい。おそらくそれは機械の発する熱のためなのだろうが、まるで生き物の体温のようだ。なんともいえぬ気持ち悪さを感じた彼は反射的に手を引く。そして、恐る恐る側面にあったボタンを押してみた。

次の瞬間、棺が生き返った。

表面の幾何学文字を電光が走り抜け、ブウンと駆動音が響き始める。それとほぼ同時にガチャッと鈍い金属音がして、棺の蓋がさながら鉛の塊のように重々しく開いて行った。直人は息をのみこみ、瞬きすらせずにその様子を見守る。額には脂汗がにじみ、背筋が冷えた。

『アーク、起動しました。いつでも使用可能です』

蓋がすっかり開かれると、心地よい女性の声が聞こえた。それによるとこのVR機はアークという名称らしい。そのネーミングを直人はピッタリだと思った。名付けた人物をほめてやりたいほどだ。彼は顔をわずかに緩ませると、ゆっくりその中を覗き込んでみる。

仰々しい見た目に反して、中は簡素なものだった。寝心地の良さ
そうなりクライニングベッドと、頭につけるヘルメット型のヘッド
セットがぽつんと置かれている。それらと外枠にあたる棺の組み合
わせはどうしようもなくちぐはぐで、後から中身だけを入れたかの
ようだ。

かすかに恐怖を感じたが、直人はベッドに身体を横たえた。今更
後戻りなど、できない。彼は渡されていた検査のデータが入ったメ
モリーを挿入口に差し込み、ヘッドセットを被る。そしてそのまま
横たわり、静かに仮想現実へと落ちていった――。

第四話 星の大地シャマイン

あやふやな世界、不確定な感覚。直人は七色に歪む世界をふわふわと漂っていた。その身体の輪郭はぼやけていて、はっきりとしない。だが、直人は不思議とそんな世界に安心感を抱いていた。母の胎内のような、すべてを包み込む感覚がここにはある。

そうして心地よく直人が漂っていると、彼の前に突然、大きな光の球が現れた。光は流体のように形を変えていく。やがて、それは少女の姿となった。さらさらと流れるような銀髪の、線の細い少女だ。その顔では、紅の瞳がどこか物憂げな光を投げかけている。

「こんにちは、狭間の世界へようこそ。私はグリゴリの末裔よ。あなたはここへ、始めてきたのかしら」

「ああ、そうだ」

アバター作成を手伝ってくれるNPCだろうか。そう思った直人はとりあえず彼女と話を合わせる。すると少女はニヤツと笑い、説明を続けた。

「そう。ならばここで姿と名、そして生き方を決めなければならぬいわね。かの世界では現世の名と姿は使えないし、生き方も新たに定めなければならないから。そうね、まずはあなたのなりたい姿をイメージして。ただし、現世のものから大幅には改変出来ないから気をつけるのよ」

「わかった」

直人は自分の姿をイメージしはじめた。すると、絵の才能などま
ったくないはずなのに驚くほど正確にイメージが定まってい
く。シ
ステム的な補助がきつとあるのであろう。彼はそう考えると、とり
あえず現実とほぼ変わらない姿をイメージした。変わっているのは、
目元が少しきつくなっているくらいであらうか。

「それがあなたのなりたい姿なのね。一度決めると変えられないけ
れど、これで本当にいいの？」

「ああ、構わないぞ」

「わかったわ。なら次にあなたの名前を考えましょう。何がいい？
他の人と重複しても構わないわよ」

重複もアリと聞いて、直人は一瞬、誰かがつけていそうな有名な
剣豪の名前でもつけようかと考えた。だが、あと一步のところで思
いとどまる。剣豪の名前など着けたところで自分が弱くては意味が
ない。自分は自分独自の名を名乗るべきだと。

「そうだな……。一刀で頼む」

「あなたの頭の中にある文字ではちょっと無理ね。カタカナであ
れば可能かしら」

「わかった、じゃあそれで」

「了解。では最後に生き方を決めましょう。決められるものとして
はいくつか候補があるのだけど……。あなたの頭の中は侍でいっ
ぱいみたい。それに決めてしまってもいいかしら？」

「もちろん。むしろ、それ以外にされたら困る」

少女はニコツと満面の笑みを見せた。白い頬に、僅かな赤みが差す。彼女は親指と人差し指でグツと丸印を造って見せた。それを見た直人はどこまでも人間染みたNPCだと思う。AIが一部で実用化されたという話を彼は聞いたことがあるが、間違いなくこの少女にはAIが使われているだろう。

「これで全部終わりよ。一旦現世へ戻ってね。今度来るときは、門を開く準備をして待っているわ」

少女の鈴の音のような優しい声が響くと、直人の意識がぼんやりとしてきた。何か、水の中を浮かんでいくような感覚が全身を包む。そのまま彼は、現実へと一旦帰還したのであった――。

夜空に煌く街。無数のビルが星屑のごとき光をあたりにばらまき、あたりは輝きに満ちている。その様子はさながら、銀河の中心にでもいるかのようだった。

直人と環はそんな美玖波の夜景を一望できる食堂にいた。曇り一つない巨大な窓の脇に円いテーブルがいくつも並べられていて、その中の一つに二人は座っている。周りのテーブルもすでに大部分が埋まっていて、楽しい声があたりに響いていた。ただし、夜景を背景にした会話にはあまり相応しくないゲーム用語が飛び交っているが。

二人はテーブルの上に並べられた食事をつつがなく食べていた。だがここで、環が不意にナイフとフォークの動きを止める。

「そういえば、直人はどんなアバターを造った？」

「ん、見たいのか？」

「ああ、興味あるからな。それにアバターを知らないとか向こうの世界で会えないぞ」

「それもそうか」

直人はそうだったとばかりに頭をかきながら、データの入ったメモリーを取り出した。彼が円柱状をしたメモリーの先端部分を半回転させると、空間キーボードが出てくる。その直後、指先がキーを素早く叩き、アバターの立体映像が現れた。

環は直人の方に顔を寄せると、アバターの細部までじっくりと見た。そして何となく納得したような顔をする。

「へえ、見た目はほとんど変わってないな。職業は侍で名前はカズトか。なんというか直人らしいアバターだな」

「そうか？ 環の奴も見せてくれよ」

「わかった、ちょっと待ってろ」

環はメモリーを取り出すと、直人とほとんど同じ動作をした。大きめの人形ほどのアバターが、空中に映し出される。それを見た直

人はちよつと驚いたような顔をした。彼の視線がにわかにはアバターの方にくぎ付けになる。

アバターはほとんど現実の環と変わらないようだった。だが、直人にとって恐ろしいほどそのアバター魅力的に見えた。まさに彼の理想の女性を具体化したようなアバターなのだ。現実の環も容姿だけで考えれば直人の好みにピッタリなのだが、このアバターは次元が違う。直人の好みに寸分たがわず合うように、職人が丹精込めて作ったかのようだ。

アバターに熱い視線を送り続ける直人。その顔はどこか緩んでしまっている。するとそれを見た環はからかうように笑った。

「フフツ、完璧なまでに直人好みだろ？」

「そうだな……って、なんでお前が俺の好みを熟知してるんだよ！」

「幼馴染に知らないことなんてないのだ。お前の好みのプレイからパソコンの壁紙まで、私は何でも知っているのだよ」

髪をかき上げながら、得意げな顔で言っただけの環。だが、彼女は致命的なミスを犯していた。それに気がついた直人の顔に、先ほどまでとは違った赤みが差していく。

「……お前、俺のパソコンを覗いたんだな？」

「な、なぜわかった!？」

「パソコンの壁紙なんて見ないとわからないだろ」

「あッ……。で、でも悪いのは直人だ。いまどき誕生日なんかをパ
スワードにしておくから……」

しまったとばかりに口を押さえ、環は弁明を始める。だが時すで
に遅し。直人の額には血管が浮かび、拳が震える。

「問答無用！」

「ぬわーーーーー!!」

夜景の美しい食堂に、環の色気が全くない悲鳴が響いた――。

翌朝。直人は昨日何事もなかったかのように目覚めると、早速E
L―Onlineをプレイする準備を始めた。プレイが可能となる
のは、今朝の七時から。廃ゲーマーであろう他のテスターたちは当
然、朝食など抜かしてプレイを開始するであろうし、環もまたそう
するつもりだった。直人もそれにつられて、朝一番からプレイを始
めるのである。

歯を磨き、服を着替えて直人は必要最低限の準備を整えた。ふと
彼が時計を見ると、針はすでに七の文字とくつつきそうになってい
る。直人は急いでヘッドセットを被ると、アークの中で横になった。

ふわり、ふわり。意識が陽炎のように揺れる。いつの間にか直人
は昨日と同じ、モヤモヤとした世界にいた。その心地よい感覚に直
人の意識がまどろむ。しかしその時、彼の目の前に見慣れた少女の

姿が現れた。

「こんにちは、昨日の人ね。今日はいよいよ世界を渡ることを御望みかしら」

「もちろん」

「よろしい。では今から門を開いてあげる」

少女は直人に背を向けると、呪文を紡ぎ始めた。滑らかにして荘厳な旋律が謳われ、あたりに光があふれていく。清らかな少女の声は空間にしみて、無数の幾何学文様が花びらのように広がり始めた。文様は次々とつながり、合わさり。やがて一つの巨大な門を形成していく。

それは、さながら天国への門のようだった。直人の眼が見開かれ、口から息が漏れる。純白の文様からなる門は山のような威圧感と、すべてを平伏させるような荘厳さを兼ね備えていた。その迫力、存在感に直人は言葉すら出ない。ただただ見つめるばかりだ。

直後、世界が震えた。

ごおんと鐘の音のような音を鳴らしながら、門が開かれていく。巨人が歩くかのような震えが空間を揺さぶり、じりじりと張り詰めるようなプレッシャーが直人に襲いかかった。さらに隙間から光が濁流のように溢れだしてきて、たちまち視界は白に奪われる。直人はそのまま為すすべもなく、光の奔流に飲み込まれていった。

意識が光の中から浮かんでいく。しばらくして、直人はようやく意識を取り戻した。彼は顔を横に何度か振ると、ゆっくりと眼を開ける。始めのうちはチカチカとしていたが、だんだんと彼の眼に周囲の景色が飛び込んできた。

彼は石畳の広がる広場に立っていた。かなり広い広場で、端がぼんやりと見える。すでにそこにはかなりの数の人間たちがいた。広い広場のあちこちに、バラバラと人影が散らばっている。夜なのか辺りが暗いので、彼らの顔をはっきりと見ることはできなかった。だが、彼らは一様に空を見ているようだ。直人もそれにつられ、空を見上げてみる。すると――。

「おおっ……！」

直人は感嘆せずには居られなかった。空に数え切れぬほどの星々が浮かんでいたのだ。空が澄んでいるとか、星が美しいということの形容ではなく、文字通り星が空に浮かんでいるのだ。遙か遠い宇宙にあるはずの星が、ジャンプすれば届きそうな場所にある。紅、青、白……星は美しいパステル調の光を空にばらまきながら、ワルツのように踊っていた。

直人がそうして空を見上げていると、彼の肩がポンポンと叩かれた。振り返ってみると、見慣れない格好をした環の姿が飛び込んできく。黒いローブを纏い、古びた長い木の杖を携えている。そういえば、環は性格に似合わず魔法使いを選んでいたなど彼は思った。どこか遠ざかりつつあった彼の意識が、ふっと帰ってきた。

「あ、環」

「むっ、環じゃない。私はリーネだ」

環ことリーネはムツと頬を膨らませた。MMOでリアルの名前を呼ぶのは結構なマナー違反である。環が怒るのも無理はなかった。ゲームをしない直人も何となくそのことを察して、彼女に頭を下げる。

「ああ、そうだったな。すまん」

「わかればいいんだ。それじゃ、早速だけど流星の平原へ行こう。ここはちよつと混んできたからな」

直人があたりを見回してみると、すでに広場は人でいっぱいになってきていた。「パーティー募集！」だの「一緒に平原へ行きませんかー！」という声が聞こえてくる。加えて次から次へとログインしてきているようで、ドンドン人口密度は上がっていた。

「確かに。だけど、流星の平原ってどこ？」

「マップを出してみろ。出したいと考えるだけで出てくるから」

「どれどれ……」

直人がマップを出したいと考えると、すぐに半透明のディスプレイが現れた。そこには見慣れない地図のようなものが表示されている。その中央はピカピカと点滅していて、『星の大地シャマイン銀河の広場』と書かれていた。さらにその右下には流星の平原と書かれている。

環はスツと手を伸ばすと、ピカピカと点滅している場所を指差した。そして訳知り顔で直人に解説を始める。

「ピカピカと光っているここが現在地だ。これを見ると星の大地シヤメインという場所の、さらに銀河の広場というところに私たちはいるらしい。それで、ここ南東に位置するのが流星の平原だ」

「ふうん。だけど、なんで流星の平原なんてところにいくんだ？隣の星詠みの山でもよくないか？」

直人は南西にある星詠みの山と書かれた場所を指差した。だが、それを見た環はわかってないとばかりに首を横に振る。

「最初は平原って相場が決まっているんだ。ほら、さっさと行くぞ！」

環は強引に直人の手を引っ張った。仕方ないとばかりに引っ張られていく直人。こうして、彼の冒険はなんとも微妙な形で始まったのだった――。

第五話 流星の平原

銀河の広場の周りには、小さな都市が広がっていた。中世風の、ミニチュアのようなかわいらしい家の並ぶ瀟洒な街だ。鱗のように石が敷き詰められた道の端に、露店が出されていたり外灯が並んでいたりする。その外灯のもたらすオレンジの光の中に、影法師がいくつも揺れていた。影法師は古びた敷石の上を、ふわふわと踊っている。それをかき分けるかのように、忙しそうな顔をした人々があたりに押し寄せてはいなくなってを繰り返していた。

そんな物語のように叙情的で美しい街並みの中を、直人と環は歩き目も振らずに歩いていった。直人は腰の刀に、環はウィンドウに表示された説明に夢中だ。彼らは道行くNPCやプレイヤーにぶつかりそうになりながらも、するりするりと通りを抜けていく。

そうしてしばらく時間が流れると、環がウィンドウを閉じた。彼女は歩きながら隣にいる直人の方を向くと、身振り手振りを交えて何やら説明を始める。

「ふうむ、大体のことはわかったぞ。まず、このE L—O n l i n eには七つの大地があるそうだ。それで、このシャメインは世界の星の運行を司っているらしい。だからこの大陸には昼がなくて、一日中夜だそうだぞ」

「へえ、一日中夜とは凄いとこだな。それで、戦闘についても何かわかったのか？」

直人は刀をいとおしそうに撫でながら、心ここにあらずというような様子で返事をした。それを聞いた環は、がっくりと肩を落とす。

「こんなロマンチックなところにいるのに、お前の頭の中は戦いのことばかりなのか……。まあいい、いくつかわかったぞ。まず、この世界での戦いは基本的にレベルとスキルが物を言うらしい。さすがに、レベルとスキルはなんのことだかわかるよな」

「それはさすがにわかるぞ。で、具体的にはどんな感じで戦うんだ？」

「基本的には現実で戦うのと変わらないらしい。ただし、痛みはないしシステムの補正もあるようだがな。レベルとスキルについてはそこまで特徴的なものはない。戦闘で得られる経験値やポイントを使って、基本的な身体能力を上昇させたり技を習得したりしていくオーソドックスなタイプみたいだ。詳しいことはその都度説明するでしょう」

「なるほど、よくわかった。他には何かないのか？」

環の顔が少し曇った。彼女はそのまま、若干歯切れの悪い口調で話し始める。

「他にも昇華とユニークスキルという概念があるのだが……。それについてはイマイチよくわからん。一応、昇華については一定の条件をクリアすることで存在の階層を上げるとか説明がされてる。条件とかについては全く不明だが、たぶん、進化に近いようなものなんだろうな」

「進化か……。まるでどっかのモンスターみたいだな。んー、ちょっと微妙か。ユニークスキルの方はどうなんだ？」

「ユニークスキルの方はもつと謎だ。これを見てもろ」

環はディスプレイを直人の方に差し出した。直人はどれどれとばかりにそれを覗き込む。するとそこには「ユニークスキル…電磁誘導」と書かれていた。直人の眉が歪み、額にしわが寄る。それはそこに書かれているにはおよそ似つかわしくない能力だった。

「これ、環の能力と同じじゃないか。どうなってるんだ？」

「さあな。本人に最も適したスキルが付与されるとか書いてあるから、たまたまかもしれん。カズト、試しにお前のも確かめてみたらどうだ？」

「……ああ、そうだな。どれどれ……」

カズトと呼ばれた直人は多少反応が遅れたものの、すぐさまユニークスキルよ出て来いと念じた。すると、空間ディスプレイが彼の前に展開。トップにステータスと書かれたその画面の下の方に彼が視線をやると、そこには「ユニークスキル…加速眼」と表示されていた。直人はびっくりしたような顔をして、環の方に顔を向ける。

「俺のは加速眼だった。ユニークスキルは能力と同じってことか？」

「いや、それだったらレッドカラー以外の人間はどうするんだ」

「うーん……。確かにそうだな」

頭をひねり始める直人と環。二人は道の端へ寄ると、歩く速度を緩める。彼らはそのまましばらくの間、ウンウンと唸りながら考え込んでいた。

そうして五分ほど経った時。環が貯めていた息を吐き出した。そして、お手上げだといわんばかりの顔をする。彼女は直人の方へ振り向くと、小さく口を開いた。

「まだ使えないようだし、いま考えても仕方ないか。そんなことより、流星の平原へ急いだ方がいいかもしれん」

「それもそうか。じゃあ急ぐとしよう」

直人と環は競うようにして駆けだした。カッカと石畳を蹴る軽快な足音が響いて行く。降ってくるような星空のもと、二人は通りを一直線に駆け抜けていった――。

流星が空に尾を引き、天から光が舞いおちる。夜だというのに、辺りは星明かりでまばゆいほどだ。地平線に果てしなく広がる緑は露を煌かせ、冷たい夜風にそよぐ。はらりはらりと揺れるその姿は、さながら星の下で踊っているかのようだった。その緑の絨毯の上に、空から流星がまばらに落ちてくる。流星といっても優しいもので、地面に当たると水玉のように光を散らして消えていった。

直人と環はそんな平原の入口にいた。二人の前には雑な造りの木の看板が立っている。看板にはかすれた文字で「流星の平原」と書いてあった。

「ここが流星の平原か……！」

見渡す限りに広がる絶景。環は自然と息をのみ、その絶景に見惚れてしまう。まるで、神が手ずから創り上げたような神々しく壮大な光景であった。これだけのものを人が作ったのか、という感動まで覚えてしまうほどだ。

一方、直人はそんな平原を睨みつけて刀を引き抜いた。きらり。星影を反射して、白銀の刀身に凶暴な輝きが走る。直人の口元が獰猛な笑みを造り、瞳が飢えたような光に満ちた。ククつと、くぐもったような息が彼の口から洩れる。

「よし、早速戦うぞ！」

「……お前はこの景色を見てなんとも思わんのか？　というか、目つきがやばいぞ！」

「やばいなんてことないさ。それよりほら、行くぞ」

環の腕を引っ張る直人。だが、環もそれに抵抗する。彼女はいやとばかりに首を振ると、直人の方に強い視線を送った。

「もっと景色を堪能してからでもいいだろう。せつかく二人っきりでこんな場所にいるんだ、もっと雰囲気というものをだな……」

直人に雰囲気について力説を始める環。だがその時、彼らの傍でガサガサと草の擦れる音がした。そして、草むらの中から緑色をした子供のような人影が出てくる。だがその顔は牙が生えている醜悪なもので、手には大振りの棍棒が握られている。どうみてもファンタジーの定番、ゴブリンだった。

「早速お出ましか！」

「っち！ 空気の読めない奴が多いな、まったく！」

慌てて杖と刀をゴブリンに向ける二人。こうして二人の初陣が始まった――。

第六話 閉ざされた世界

一閃。刀が煌き、光の筋を描く。刃は吸い込まれるようにゴブリンの身体を袈裟に斬り、光の粒が溢れだした。直後、ゴブリンの身体がにわかに紅く点滅し始める。ゴブリンの動きが鈍り、苦しそうな顔を始めた。

「せやああああ！」

気迫とともにもう一度刀が振るわれる。刀は寸分たがわず先ほどと同じ場所に命中。ゴブリンの身体は先ほどよりもさらに激しく光を散らす。光は暴走するホースの水よろしく撒き散らされ、あたりを白に沈めていく。

やがてその光は収まり、ゴブリンの身体が透けていった。そのままゴブリンはあとかたもなく消えてしまい、その場には粗末な棍棒だけが残される。さながら、幽霊が消えていくかのようなだった。

戦いを終えた直人は拍子抜けしたように息をついた。彼は茫然としている環の方へと振り向くと、軽い調子で言う。

「あっけないな。やっぱゴ布林だからか？」

「私の分もとっておいてくれ……」

一人でゴ布林を倒してしまった直人に、環は非難めいた視線を送る。まったく活躍できなかったのだ、当然だろう。だが、直人はそんな彼女の視線くらいどこ吹く風といった具合でほとんど気にしない。彼は落とした棍棒を回収すると、すぐさま次の敵を倒すべく

平原の中へと向かっていった。

「仕方ないやつだな……」

環はぼそつと呟いた。彼女は直人の後をしぶしながら追っている。こうして二人は平原の中へと足を踏み込んでいった――。

しばらくして。街からやってきたのか人がかなり増えた平原で、二人は別れて狩りにいそしんでいた。やはりゴブリン程度の相手に二人がかりだと効率が悪いのである。なので二人はお互いが小さく見える程度に距離をとり、ひたすら平原の魔物を狩っていた。

『おめでとうございます！ レベルが2に上昇しました！』

黄色いゴブリンというちょっと珍しい魔物を倒した時、直人の頭にアナウンスが響いた。直人は一旦、離れて狩りをしている環を呼ぶ。

「おい、レベルが上がったみたいだ」

「ほんとか？」

環は戦っていたゴブリンにとどめをさすと、直人の方に近づいてきた。直人は彼女が十分ディスプレイが見える位置に来たことを確認すると、ステータスを表示させる。するとそこには確かに「カズ

ト…レベル2 職業…侍」と現れた。

「確かに上がってるな。何か変わったことはあるか？」

「うーん、身体がちょっと軽くなったような……。気がしないでもない」

直人はその場で少しジャンプしてみた。ヒュウと風切り音がしてさっきまでより多少高く跳べた……。ような気がする。E L O n i n eは具体的な数値としてステータスが公開されないの、どれくらい上がったのかは不明だ。だが、確かにステータスは上がっているのだろう。直人は自分の身体に確かな力が満ちているのを感じた。

「ひとつ上がっただけではそんなに変わらんか。まあいい、私もたぶんそろそろ上がるだろう。そしたら一旦戻るとしようか」

「いや、もうちょっと戦っていかないか」

「もう何時間もたってるんだぞ。そろそろ帰るべきだ」

「……仕方ないなあ」

環の強い主張に直人はしぶしぶといった顔で了承した。環はうんうんとうなずくと、元いた場所の周辺に戻っていく。こうして二人はまた狩りにいそしみ始めた。

そうして三十分ほどが過ぎたころ。環の頭の中で、直人と同じアナウンスが響いた。彼女は直人を呼ぶと、そのまま街へと連行していく。こうして二人は一旦、街へと帰っていった。

二人は街の通りをゆっくりと歩いていた。彼らは互いにディスプレイを出して、今回の戦果を確認している。何も入っていなかったアイテム欄には、ゴブリンからドロップしたアイテムがずらりと並んでいた。

「棍棒が四本、腰布が六枚。あと、錆びた剣とゴブリンの結晶とやらが一つずつか。カズトはどうだった？」

「俺の方は棍棒が五本と腰布が七枚。それと剣が二本だけだ。結晶はないな」

「結晶はレアアイテムなのか？ どうせゴブリンだから大したことないのだろうが……」

二人はいろいろと話しこみながら、街の中を散策した。街の中にあるはずであろう、アイテムの鑑定所を捜しているのだ。すると二人の前に周りの建物より一回り大きな建物が現れる。レンガ造りで間口がかなり広く、どこか役所のような建物だ。

その建物にはNPCと思しき人間が大量に出入りしていた。全員、武器を身に帯びていて物々しい雰囲気だ。おそらく冒険者という人種だろう。直人と環はそんな彼らのうちの一人に近づいて行くと、話を聞いてみる。

「すまない、ちょっと聞きたいことがあるのだが」

「おッ、なんだ？」

「この建物っていったい何なのだ？ さっきからずいぶん人が出入りしているように見えるのだが」

話しかけられた男は、呆れたような顔をした。彼はそのままからかうような笑みを浮かべると、ふふんと鼻を鳴らす。

「さてはお前さんたち、ルーキーだな？ ここの建物は役所。アイテムの換金からクエストの受注まで、冒険者には必須の建物だぜ。覚えときな」

「なるほど、ありがとう！」

「おう、気をつけろよ」

男に見送られて、二人は役所の扉を開いた。すると二人の目の前に広いスペースが広がる。雰囲気のあるアンティーク調の部屋で、天井から大振りのランプがいくつも垂れている。その奥にある酒場風の幅広のカウンターには、いくつかの札が掲げられていて、そこに何人かの受付嬢が並んでいた。その前では冒険者たちが手持無沙汰そうにたむろしている。

直人と環は早速「アイテム鑑定・買い取り」と書かれた札のもとに並んだ。ちょうどタイミング良く前の冒険者の用事が終わり、すぐに彼らの順番が回ってくる。二人はアイテム欄からドロップアイテムを出すと、布の広げられたテーブルの上にばらばらと並べた。

「品物はこれだけかね？」

「ああ、そうだよ」

メガネをかけた鑑定人と思しき老人に、直人は軽い調子で答えた。老人は胸ポケットから虫眼鏡を取り出すと、アイテムをすべて丁寧に確認する。やがて彼はテーブルの下から小さな袋を取り出すと、それを直人たちの前にドンと置いた。

「粗末な棍棒が九本に、ボロの腰布が十三枚。それから錆びた剣が三本にゴブリンの結晶が一つ。全部合わせて合計千二百四十シーで買い取るが、いかがかな？」

千二百四十シーというのがどれくらいの金額なのか、直人にはよくわからなかった。だが、まさかNPCがぼったくるということはないだろう。直人は環の方を振り向き、彼女がうなずいたのを確認すると老人に頭を下げた。

「それで頼む」

「わかった。それが代金じゃ、もっていくがええ」

老人は顎で小袋を示した。直人はそれをつかむと、環を連れてカウンターを離れていく。こうしてアイテムを換金した直人と環は、ひとまず役所を出た。

「さてと、そろそろ良い時間になってきたな」

良い武器屋でもないかと商店の並ぶ通りを冷やかしていると、不意に環が直人に告げた。直人が時計を出してみると、そこには18…55と表示されている。ゲームを開始したのが午前七時からだったので、まるまる半日近くが経過していた。彼は少し驚いたような顔を見ると、ゆっくり首を縦に振る。

「そうだな。一区切りついたし、一旦ログアウトするか」

このβテストで夕食が出される時間は19…00からである。今からログアウトするとちょうど、夕食が始まる時刻だ。ゲーム的な満腹度はいっぱいであるものの、何となく腹が空いたような気がする二人は迷わずログアウトしようとする。すると――。

『エラー！ ログアウトできません！』

二人の耳に、なんとも不愉快な機械音が響いた――。

第七話 神の言葉

あり得ない言葉。直人と環は互いに顔を見合わせる。二人の顔は蒼白で、眼には不安が滲んでいた。凍りついてしまったような彼らは、瞬き一つしない。されど、しばらくして二人は無理やりに笑みを浮かべた。

「……ちよつとしたトラブルだよな？」

「あ、当たり前だろう！」

二人は思考を集中して、もう一度ログアウトしようとした。されど、同じ内容のメッセージがまたも繰り返される。吹き抜ける冷たい風に、背筋が冷えた。彼らの頭の中を不吉な言葉がよぎる。だが、二人はそれを口にはしなかった。口にしてしまえば、より不安になるのは目に見えている。

ちようど夕食時でキリが良かったのだろう。直人たちの他にも、なにやらログアウトできなくなったらしいプレイヤーの姿がちらほらとみられた。彼らは一様に凍りついたような笑顔を浮かべて、乾いた笑いをこぼす。何となく嫌な雰囲気、街を漂っていった。

ログアウト出来ないプレイヤーたちは小説やアニメの影響か、ほとんどの人間が直人たちと同じ単語を思い付いた。だが、誰もそれを口にしようとはしない。まるでそれは、口にすることがタブーになっているかのようだった。しかし、その時。暗黙の了解を破って、一人の男が素っ頓狂な声を上げた。

「デ、デ、デスゲームだあああ！」

気弱そうな男は頭を抱ると、そのまま地面にうずくまる。彼の顔は蒼白で、身体はぶるぶると小刻みに震えていた。そのただならぬ様子に、近くにいたプレイヤーたちは彼に駆け寄る。彼らはどこかぎこちない笑みを浮かべると、口々に「心配ない」と男に声をかけた。だがその声はどこか弱弱しく、まるで自分に言い聞かせているようだ。

そうしていると、最初の男以外にも騒ぎだす連中が現れた。彼らはこの世の終わりが来たような絶望的な表情を浮かべ、道の端に座り込んだり叫びだしたりする。集団パニック、とでもいうべき状況。残された正常なプレイヤーたちは、彼らを何とか落ちつけるべく奔走する。そうでもしないと、自分たちまでおかしくなりそうだ。

皆が皆、心の奥底にただならぬ恐怖や不安を感じ、異様な雰囲気
が街を漂い始めた。まるで戦時下だ。直人と環は用もないのにフラフラと動き回り、気分を落ち着かせようとする。その時――。

『御機嫌よう』

空から声が降ってきた。街中の人々は騒然として空を見上げる。すると、そこには異様な物体が浮かんでいた。

「石版……？」

それは巨大な黒い石の塊であった。闇に溶けるその滑らかな表面には、七つの眼と奇怪な文様が所狭しと刻み込まれている。文様は不気味に光ってうごめき、生きているかのようだ。

『我々はエッセネの末裔。旧き書の正当なる守り手である』

複数の人間が同時にしゃべっているかのような、重層的な声。それは確かに、この石版から降ってきているようだった。人間たちはみな、固唾を飲んで石板を見守る。

『約束の時間が訪れた。穢れた我らは再び丘に血を流さねばならぬ。汝らは与えられし奇蹟を用い、迫りくる試練を超えよ。試練を超え至高天にたどり着いた時、汝らは御子となる。新たなる御子が流浪の民を一つにすれば、再び安息の時間が来るであろう』

石板の言葉はほとんどのプレイヤーに理解されなかった。ほとんどの人間が、ぽかんとした顔で空を見上げる。だがご丁寧にも、一部の博識なプレイヤーたちがその意味を自然と口ずさんだ。

——デスゲームの始まりだ、と。

ささやきはまたたく間に伝播した。爆発する悲鳴、狂ったように暴れ始める人々。

辺りにはログアウトを求める悲痛な叫びがこだまし、街は混沌とした様相を呈する。正気を保っているプレイヤーなど一握りで、大多数のプレイヤーが途方もない混乱状態に陥った。だが、石板は無慈悲にもそんな彼らに言葉を投げかける。

『汝らは選ばれし覚醒者である。ゆえに、定められた運命から逃れることはかなわぬ。もし逃れたとしてもその先にあるのは煉獄のみ。そのことをよくよく心に留めておくべし』

石板は徐々に薄らいでいき、星空に溶けた。人々はもはや茫然自失として、騒ぐ元氣すら残されていない。彼らの顔はみなうつろで、

瞳に光がなかった。

『コード666が発動されました。プロテクト全解除、ユニークス
キル解禁』

不意に響き渡った機械的な音声、それと同時に世界がクリアになった。プレイヤーたちを知らず知らずのうちに守っていた、衣服が取り払われたかのような。吹き抜ける夜風がなまめかしくなり、どこか人形のようなだった身体が体温を帯びる。人々はそんな仮想世界で感じる生感覚に、嫌悪を感じずにはいられなかった。

直人と環も例外ではなかった。二人は空を見上げて、石化したようになっていく。その顔にあるのは悔しさか、悲しさか。そのどちらともとれない混沌とした感覚だった。二人は目じりが裂けそうなほど眼を見開き、瞬き一つしていない。

するとここで、唐突に環が崩れ落ちた。バサツという音とともに、華奢な身体が地面に落ちる。彼女の表情が一気にやるせない思いに沈んだ。

「すまない……。私がこんなゲームに誘ったから……！」

環は眼から涙を流すと、地面を殴り付けた。彼女の手から、光の粒ではなく紅の血が流れる。デジタルな光ではなく、温かく鉄臭い血がだ。そのことが何よりも雄弁に、事態の深刻さを彼女に訴えた。彼女は苦悶に顔をゆがめながら、より一層すすり泣くような声を上げる。するとここで、筋肉質な腕が地面を打ちすえる彼女の手を止めた。

「環のせいじゃない！ 悪いのは運営の奴らだ！」

「直人……」

「今はそれより生き残ることが重要だ。……とりあえず、現状を確認しよう」

環の肩に手を掛けながら、ゆっくりと立ち上がる直人。その顔はいつになく険しかった。だが、生気を失ってはいない。彼の眼には強い意志が存在し、虚無感などひとかけらもなかった。彼は、現実を受け入れようとしているのだ。環はとっさに涙をぬぐい去ると、直人の方を強い意志のこもった眼で見つめ返す。こうして遊びだったゲームは終わり、生死をかけたデスゲームが始まった――

第八話 超速ウサギ

運命の日より三日が過ぎた。その間、E L－O n l i n eの世界では不気味な沈黙が訪れていた。一部のプレイヤーたちが危惧したP Kが横行するような事態にはならなかったものの、プレイヤーたちは全体的に街の中へ引きこもりがちになっている。攻略組といわれる一部の廃人を覗いた大多数のプレイヤーたちは、たびたび街の外へ出ては必要な分だけモンスターを狩るという生活を送っていた。

そんな彼らが持て余した時間を使って行ったのは、運営の残した言葉の分析だった。彼らはいつのまにか実装されていた掲示板機能を用い、有り余る時間を費やして言葉の解析を図ったのだ。その結果、次のような考察がなされた。

●運営が名乗ったエッセネの末裔とは、おそらくユダヤ教エッセネ派の末裔であることを示していると思われる。

●旧き書の正当なる守り手、とは何か重要な古い書物を伝えてきたということだろう。エッセネ派を名乗っていることを考えると、旧き書とは死海文書関連の書物だろうか。

●「丘に血を流す」はおそらくゴルゴダの丘で為されたキリストの殉教を暗示しているもの。つまり、E L－O n l i n eで人が死ぬことを示しているようだ。

●神に与えられた奇蹟とは、超能力のことらしい。事実、E L－O n l i n eのテストに参加していたのはすべてレッドカラーだった。

●至高天とは、始まりの大陸がシャメインであることを考えるとアラボト大陸のことだと思われる。つまり、試練を超えて至高天の扉をくというのはモンスターを倒してアラボト大陸へ行けということか。

●流浪の民はおそらく現実の人間全体だと思われる。バベルの塔の

伝承を元にしての発言か。

●御子が流浪の民の一つに、ということはこのEL-Onlineを用いて生き残ったプレイヤーが人間の統合でも図るということだろう。だが、どうやって人間の統合などという途方もないことを行うのか。

●選ばれし覚醒者というのはレッドカラーのことか。しかも選ばれし、という言葉からするとレッドカラーの中からさらに選抜されたのか？

●逃れた先は煉獄のみ、というのはログアウトしたら死ぬということか。

——このようにプレイヤーたちが考察を繰り広げる中で、直人と環は平原でレベル上げに励んでいた。とりあえず、運営が目標として示したアラボト大陸を目指そうというのである。だが、そのためにはレベルが高くなくてはお話にならない。それを考えてのことだった。こうして二人は最前線で、廃人たちと共にレベル上げに励んでいた。

だが、閉じ込められて三日目にもなると、開き直ってポジティブになる人間も増えてきたらしい。閑散としていた平原にも、徐々に人が増えてきていた。そんな中、直人と環は平原の最深部で狩りをしていた。そこは現在のところ、彼らと数十名の廃人しか到達していないポイントである。

光が降り注ぐ丘。手を伸ばせば空の星に手が届きそうなほど天に近く、空気は清浄。静けさがあたりに満ちて、神秘的な雰囲気にあ

ふれている。直人と環はそんな丘の頂上付近でゴブリンキャップというモンスターを狩っていた。紅い服を着た、通常のゴブリンより大幅に強いモンスターだ。二人はそれを、ユニークスキルの加速眼や電磁誘導を使って倒していく。

ユニークスキルは戦いにおいて大きなウェイトを占めていた。というよりも、これあつての戦いといってもいいかもしれない。直人の加速眼はいうに及ばず、環の電磁誘導も大幅に強化され非常に強力な物となっていたのだ――。

「ハアッ！」

指先から迸る稲妻。雷鳴が大気を轟かせ、光がゴブリンキャップに直撃する。緑の皮膚がはじけ飛び、血の華が咲いた。ジュツと肉が焼ける音が流れ、焦げたにおいが満ちる。

ゴブリンキャップの動きが急速に鈍る。その動きはさながらロボットのよう。そんな鈍重なモンスターを今度は刃が切り裂いた。光が一閃して、首が飛ぶ。たちまちのうちにゴブリンは倒れて、宙に消えていった。その後にはどす黒い血痕と、紅の服だけが残される。加速を終えた直人はそれを見ると、フウと一息ついた。

「終わった。リーネ、これで何匹目だ？」

「ざっと三十匹は倒したんじゃないか」

「うーん、まだレベルアップしないのか……」

直人は大きく肩を落とした。この三日間で、二人のレベルは揃って6まで上がっている。だが4を越えて以降、急速にレベルアップ

のペースが落ちていた。それまではゴブリンを二十匹も倒せばレベルが上がっていたのだが、4を超えて以降は百匹単位だ。明らかに何か壁のようなものがある。

環はぶつぶつと呟く直人の方を見ると、顔を曇らせた。そして少々自信なさげに言う。

「もしかすると、適正レベルを超えると入る経験値が少なくなる仕様なのかもしれんな」

「ということは、そろそろ狩り場を変えろってことか？」

「いや、まさか。もっとレベル帯に幅があってもいいだろう。他にも狩れるモンスターが居るんじゃないか？」

直人と環はあたりを見回した。二人の眼に、静かな草原が飛び込んできく。二人のほかにも何人か狩りをしているプレイヤーがいるが、それ以外は至って平穏なものだ。とくに強そうなモンスターなど見当たらない。二人はそれを見て、安心したようながっかりしたような気分になった。

ゴブリンキャップ以上に強いモンスターというのを二人はこれまで見たことがない。一応、ここが平原の最深部なのでゴブリンキャップがこのあたりで一番強いモンスターということになるのだろうか。だが、レベル帯を考えるとそれはちょっとどうかと思われる。二人はうーんと悩むような顔をした。

しかしその時、直人があることに気がついた。彼はディスプレイを出すと、早速その案を環に提案してみる。

「モンスターの出現情報とか乗せてるスレってないのかな？」

「なるほど。それもそうだな」

うんうんとうなずいた環。直人はディスプレイを操作し、掲示板機能を呼び出した。さらに掲示板のトップにあるスレッド検索の欄に、モンスター出現と打ち込んでみる。すると早速、モンスター出現情報スレというなんともおあつらえ向けなスレが見つかった。

【ゴブリン】モンスター出現情報スレ【ばかり】

1…名無しの冒険者さん

モンスターの出現場所などの情報をできるだけ詳細にお願いします。
全員生還目指して、頑張りましょう。

2…名無しの冒険者さん

名前…ゴブリン

出現場所…流星の平原全体

特徴…緑色の人型。棍棒で武装している。

強さ…初心者でも苦勞しない程度。棍棒さえ気をつければほぼ間違
いなく勝てる相手。

3…名無しの冒険者さん

名前…イエローゴブリン

出現場所…流星の平原の真ん中あたり

特徴…黄色のゴブリン

強さ…ゴブリンを若干タフにした感じ。ゴブリンと同じように棍棒
に気をつければ大丈夫。

——二人がスレの内容を読んでいくと、そのほとんどが見たこと

あるモンスターの情報でしかなかった。だがあるレスを見た途端、その顔色が変わった。

34…名無しの冒険者さん
名前…不明（ウサギ？）

出現場所…流星の平原奥地
特徴…角の生えたウサギ。角が生えてる以外は、びっくりするぐらい普通のウサギ。

強さ…やたらつよい。突撃が主な攻撃手段のようだが、一発喰らうとHPが三割ぐらい持っていかれる。ちなみに俺はレベル5の戦士。しかもめっちゃ動きが早くて攻撃が当たらない。おとなしいのでこちらから手を出さなければ大丈夫だが、もし突撃されたら逃げた方が吉か。

——二人の目元がにやりと歪んだ。彼らは互いに顔を見合わせる
と、やったといわんばかりに微笑む。

「カズト、こいつって……」

「ああ、うってつけのモブだな」

二人はそう小声でささやくと、一旦街へと引き返していった。翌
日からの、ウサギ狩りに備えて——。

お知らせ（前書き）

突然ではありますが、重要なお知らせです。

お知らせ

突然ですが、このE L－O n l i n eを改訂版として新たに書きなおすことといたしました。

理由についてなのですが、あるスレに晒したところ序盤の説明が詰まりすぎているという評価をいただいたのがきっかけです。

序盤の説明については私自身も詰め込みすぎていると思っていたので、さっそく改訂に取り掛かったのですが、それが予想以上に大がかりなことになってしまいました。なのでちょうど序章が終わったところでもありましたので、一から書き直そうということにしたのです。

ですので誠に勝手ではございますが、以下のURLにある改訂版の方をお気に入り登録し直していただけると幸いです。

E L－O n l i n e (改) h t t p : . / n c o d e . s
y o s e t u . c o m / n 2 8 0 2 y /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9471x/>

EL—Online

2011年11月6日15時44分発行